

永痛の追憶

巖 明

電話のむこうの浅山君の声を聞いて、心が深く沈んだ——佐野先生がなくなられた。受け入れがたい事実だった。あれほどすぐれた学者が飄然として去られたのだ。しかも6年前に先生とかわした願いをまだかなえていないというのに。

眠れなかった。目を閉じれば佐野先生とはじめてお会いしたときの情景がありありと浮かぶ。それは神奈川大学の生協食堂で昼食をとっていたときのことだった。たまたま先生と同卓になり、中国語学科の山口先生から紹介を受けた。佐野先生のまるいお顔は、両眼を細められるとまるで仏様のようにであり、きちんと整えられた服装や丁寧に梳られたやや薄い髪とあいまって、昔風の日本の学者の謹厳で端正な風を思わせた。先生はお話好きで、すぐに日本漢詩のお話になり、談笑風を生ずといった様であった。先生の笑い顔は山口先生のそれと似ているようにも思われたが、そのお声をよく聞くと、中に一筋の矜持が聞こえ、さらにそこに先生の叡智がうかがわれて、山口先生のみらきらと朗らかな笑いとはまた異なるところがあつた。

日本漢詩研究というご縁によって、私は二年の日本滞在の間に、佐野先生のお仕事を深く知るようになった。その最初は、大学の図書館で発見した数十冊もの『日本漢詩選集』であった。書架に長く並んだ書物の上には、三名の編纂者のお一人として佐野先生のお名前が輝いており、肅然とえりを正す心持を抱かされた。のちにはまた、先生の該博な知識だけでなく、後輩を温かく導かれるその人柄にもふれることとなった。先生は、私と浅山君が江戸時代の日本漢詩の共同研究に意欲を持っていることをご存じになると、自ら多くの貴重な資料を見せてくださったばかりでなく、静嘉堂図書館や天理大学付属図書館などへの紹介の労をとってください、さらには私たちの研究成果の出版も促してくださいました。

佐野先生のお話は風趣に富み、日本の古今の事情に通じているばかりでなく、日本の学者が持つ、あの人の心をよく解するユーモアに満ちた風を感じさせるものだった。先生の研究室は生協食堂のむかしの建物にあり、多くの書物が堆く積まれていた。時おり昼食後に訪ねてドアから入ると、声は聞こゆれどその人は見え、書架に積まれた書物の間をいくどか曲がってやっと先生にお目にかかれるといったぐあいだった。またお話のあいまに、珍しい古籍や古物を見せていただくこともあった。長年かかって收藏された珍品を自慢げに一つ一つ見せてくださるとき、まるいお顔をかすかに左右にゆらしながら、細めた目を得意そうにかがやかせていらつしやるあのうれしそうなご様子は、まるで老いてこどもに還えられよう、今でも目にありありとうかぶ。

私が帰国するときに、先生はある酒店に饞別の宴を設けてくださった。その席で先生は仏教の無常観について語られ、さらにご自分が少年時代を上海でおくられたこととお話になって、上海や蘇州を訪れて昔日の思い出の地を尋ねたいという希望をもらされた。私も、少年時代の思い出の地を訪ねるといふこのすばらしいくわだてのお手

伝いができたらと考え、先生を上海・蘇州にお迎えできる日を心待ちにしていた。帰国後、何度かお手紙を差し上げ、一日も早い旧地への再遊をおすすめしていたのであったが、今となっては、すべてがおそくなってしまった。いまだ果たされていないあの願いと美しいあの思い出は、佐野先生の突然のご逝去によってすべておわってしまつたのだ。そして尽きることのない追憶と懐念の中に沈む私たち後輩だけが残される。

手を合わせて遥か東方を望み、佐野先生の天にあらせられる魂が永遠に目を細めて微笑まれることを静かに祈りするだけである。そして私はずっと蘇州で先生のおいでをお待ちしよう。